



第2次豊田市文化芸術振興計画【改訂版】 計画の進捗状況の総括 施策・事業の実績

■施策Ⅰ＜みる・ふれる＞多様な鑑賞・体験機会の拡充 【主な取組12事業】

（1）気軽に文化芸術に出会う機会の拡充

文化施設での気軽に参加できる公演や展覧会のほか、学校や地域等へのアウトリーチ活動などを積極的に展開し、様々な市民が身近に文化芸術に触れる機会を提供する。

主な取組		指標 1（成果を数値で測る指標）						指標 2（成果の評価に用いることができる状態等）		所管課
NO.	内容	策定時 （把握年度）	目指す 方向	実績 ※太字は目指す方向のとおりに推移を示す				実績		
				2022 年度	2023 年度	2024 年度	2025 年度			
1	クラシック音楽普及啓発事業 （かへるくラシック、親子対象 コンサート等）	鑑賞者数 5,216 人 (2019 年度)	↑	6,082 人	7,282 人	6,462 人		かへるくラシック♪シリーズでは、より幅広い来場者層の開拓を目指し、ストリートピアノ YouTuber のコンサートを開催した。コンサートに足を運ぶ機会が少ない若年層から現役世代層（50 歳代まで）の来場が多く、初来館者が 4 割を占めた。	文化振興課 （財団共催）	
2	能楽普及啓発事業（わくわく能 楽体験、小中学生のための能狂 言鑑賞会等）	鑑賞者数 955 人 (2019 年度)	↑	916 人	1,814 人	1,255 人		「わくわく能楽体験」の来場者は 5 割がこどもであり、ワークショップ付き公演のこどもたちの関心の高さがうかがえた。アンケート結果から、土蜘蛛のような動きのある曲目は年齢を問わず楽しめたことが分かり、普及啓発としての効果が感じられた。	文化振興課 （財団共催）	
3	クラシック音楽・能楽地域活性 化事業（学校等へのアウトリー チ活動）	鑑賞者数 1,379 人 (2019 年度)	↑	1,056 人	1,731 人	1,672 人		小学校 8 校、中学校 2 校で実施した。かすがい市民文化財団との連携で実施したアウトリーチでは、アーティストがコンサートだけでなく自身の経験を織り交ぜた進行を行うことで、児童との対話型の鑑賞機会が作れた。	文化振興課 （財団共催）	
4	クラシック音楽・能楽地域活性 化事業（出前コンサート、ロビ ーコンサート）	鑑賞者数 2,026 人 (2019 年度)	↑	1,398 人	2,272 人	3,219 人		0 歳から参加できる「そらのコンサート」では毎回約 300 人がコンサートを鑑賞し、アンケート回答者の 100%が内容に満足と回答した。「久しぶりの生演奏に涙しました」という意見もあった。	文化振興課 （財団共催）	
5	おいでんアート体験フェア	参加者数 6,200 人 (2017 年度)	↑	2,065 人	3,000 人	3,129 人		—	文化振興課 （財団共催）	

（2）幅広い分野の文化芸術に親しむ機会の拡充

美術館、コンサートホール・能楽堂、市民文化会館等の文化施設において美術、音楽、舞台芸術など様々な分野の公演や展覧会等を開催することで、古典芸能から現代の新たな表現まで、幅広い文化芸術の鑑賞・体験機会を提供する。

主な取組		指標 1（成果を数値で測る指標）						指標 2（成果の評価に用いることができる状態等）		所管課
NO.	内容	策定時 （把握年度）	目指す 方向	実績 ※太字は目指す方向のとおりの推移を示す				実績		
				2022 年度	2023 年度	2024 年度	2025 年度			
6	クラシック音楽鑑賞事業	鑑賞者数 10,373 人 (2019 年度)	→	6,614 人	12,399 人	11,663 人		—	文化振興課 (財団共催)	
7	能楽鑑賞事業	鑑賞者数 3,357 人 (2019 年度)	→	1,894 人	2,359 人	2,788 人		—	文化振興課 (財団共催)	
8	美術館展覧会開催事業	観覧者数 261,615 人 (～2020 年度まで 直近 4 年度平均)	→	205,676 人	203,046 人	224,836 人		展覧会毎のアンケートから満足度は高く、不満という回答はほぼ無い。初めて来館する方が一定数（約 4 割）いることから常に新たな集客ができており、また展覧会によって家族層や若年層など来館者層は異なるものの、年間をとおして幅広い年齢層へ当館の魅力を発信できた。	美術館	
9	美術館での教育普及事業（アーティストトーク・講演会等の開催）	参加者数 1,149 人 (2019 年度)	→	1,995 人	1,190 人	1,816 人		—	美術館	
10	美術館での教育普及事業（作品ガイドボランティアによるギャラリーツアー）	参加者数 2,570 人 (2019 年度)	↑	1,981 人	3,028 人	5,620 人		—	美術館	
11	民芸館展覧会の開催	観覧者数 13,188 人 (2019 年度)	↑	14,464 人	17,432 人	31,029 人		企画展に関連した商品や季節ごとに飲食物の販売を開始したことにより集客が増えた。	民芸館	

（３）公共的空間等の活用による文化芸術の浸透

公共的空間や商業施設等での作品展示や舞台公演などの機会を増やし、日常の場での文化芸術の浸透を図る。また、新たな文化イベントの誘致・開催を推進し、市民が現代の文化芸術表現に接する場を増やす。

主な取組		指標 1（成果を数値で測る指標）						指標 2（成果の評価に用いることができる状態等）		所管課
NO.	内容	策定時 （把握年度）	目指す 方向	実績 ※太字は目指す方向のとおり推移を示す				実績		
				2022 年度	2023 年度	2024 年度	2025 年度			
12	とよた市民アートプロジェクト（まちなか芸術祭の開催）	①来場者数 2,685 人 ②会場数 8 か所 （2020 年度）	↑	① 4,483 人 ② 10 か所	①1,072 人 ② 4 か所	①2,566 人 ② 11 か所		展示する作品に審査員を置いたことで市外作家や大学生の応募が増え、新規来場者（約 7 割）や市外作家とまちなか店舗等との関わりしろを作ることができた。また、作家も運営に関わることで、作家とボランティアや来場者との交流が生まれた。	文化振興課 （財団共催）	

- 【施策の評価・課題】
- 2020 年度、2021 年度は、コロナ禍の影響により多くの文化事業が中止となり、文化芸術に触れる機会自体が失われました。しかし、2022 年度以降は、分散退場や大型モニター付きサーモグラフィー設置など新しい鑑賞様式等の取組により「みる・ふれる」機会が創出できており、2024 年度では鑑賞者数自体はコロナ禍以前に戻ってきているといえます。
 - コンサートホール・能楽堂で開催する普及啓発事業をはじめ、美術館、市民文化会館等の文化施設で実施する気軽に文化芸術に出会う取組については、多くの鑑賞者があったことから定着してきたといえます。2024 年 4 月にオープンした博物館の利用も約 28 万人あり、新たな文化施設でも多様な取組が推進できていることで、「みる・ふれる」機会の創出がより図れていると考えます。一方で、能楽鑑賞事業については、鑑賞者数がコロナ禍以前まで回復していません。高齢者層の鑑賞者が多く、「敷居が高い。分かりにくい。」という声もあるため、新たな層を狙った興味が持てる公演等を企画していく必要があります。
 - こどもの鑑賞・体験機会については、学校へのアウトリーチ活動やコンサートホール・能楽堂公演へのこども無料招待をはじめ、博物館・美術館を活用した学習など様々な取組が行われています。特に、博物館・美術館を拠点とした学校との学習連携事業「博物館学習事業」は博物館オープンと同時に開始され、市内のすべての小学校 6 年生、中学校 2 年生が学んでいます。一方で、こどもの鑑賞・体験機会は親や周りの大人たちの関心が影響します。今後もこどもたちが気軽に文化芸術を鑑賞・体験できるよう取組を継続・充実させていくとともに、親や周りの大人たちの関心を高める取組や、施設の外での取組を充実させることで、より一層こどもたちの「みる・ふれる」機会を創出していく必要があります。
 - 公共的空間や商業施設等での作品展示やコンサート等を開催し、日常の場で気軽に文化芸術を「みる・ふれる」機会は一定程度創出できました。しかし、実施回数や期間は限られているため、より日常の場での発表機会や展示機会を増やすことで、より多くの市民が気軽に「みる・ふれる」機会を創出していく必要があります。また、豊田市駅周辺のまちなかが開催会場となることが多いため、それ以外の地域に暮らす人々に対しても、気軽に「みる・ふれる」機会を創出する取組も必要です。

■施策Ⅱ <つくる・つたえる> 活発な創作活動の推進 【主な取組 10 事業】

(1) 市民の創作・発表機会の充実

市民が気軽に創作活動に親しむ機会をつくるとともに、公募展や参加型公演等を開催し、日頃の活動成果を発表できる場を提供する。

主な取組		指標 1（成果を数値で測る指標）						指標 2（成果の評価に用いることができる状態等）		所管課
NO.	内容	策定時 （把握年度）	目指す 方向	実績 ※太字は目指す方向のとおりに推移を示す				実績		
				2022 年度	2023 年度	2024 年度	2025 年度			
13	豊田市民美術展の開催	応募者数 388 人 (2019 年度)	→	420 人	383 人	374 人		「落選したものの、来年度も応募したい。」という声が多く、市民の創作意欲の向上に寄与している。また、こどもたちを対象としたワークショップを開催することにより、新たな層の来場者の掘り起こしができている。	文化振興課	
14	高齢者作品展の開催	応募者数 405 人 (2019 年度)	↑	284 人	253 人	257 人		最高齢出展者から、「作品作りが生きがいになっている。」という声があり、個人の喜び・生きがいに繋がっていると言える。また、老人ホームから、「利用者みなで、一つの作品を作りあげることができる。」という声があり、居場所づくりにも繋がっている。	地域交流課	
15	障がい者作品展の開催	応募者数 704 人 (2019 年度)	→	694 人	904 人	775 人		年々出展数が増えており、障がい者の自己表現の場として広く認知されている。また、来場者アンケートでも好意的な意見が多くあり、障がいに対する市民の理解を深めるよい機会になっている。	障がい福祉課	

(2) 若手芸術家の発表機会の充実

地元の若手芸術家が活動成果を発表する場として、若手演奏家による公演の開催や、舞台芸術人材の育成などを充実し、次世代を担う活動者の支援や育成を図る。

主な取組		指標 1（成果を数値で測る指標）						指標 2（成果の評価に用いることができる状態等）		所管課
NO.	内容	策定時 （把握年度）	目指す 方向	実績 ※太字は目指す方向のとおりに推移を示す				実績		
				2022 年度	2023 年度	2024 年度	2025 年度			
16	少年少女合唱団の運営	団員数 126 人 (2020 年度)	→	98 人	97 人	94 人		東京国際コンクールで文部科学大臣賞（日本の合唱団のうち最も優れた団体に贈られる賞）のほか、市内外のイベントに出演（8回）し活躍した。卒団後も活動や運営をサポートする団友会にこれまでに 266 人登録しており、定期演奏会への出演や、パンフレットの作成など活動を支えている。	文化振興課 (財団運営)	
17	ジュニアオーケストラの運営	団員数（うち市内） 55 人（19 人） (2020 年度)	↑	45 人 (14 人)	54 人 (12 人)	58 人 (13 人)		定期演奏会の来場者アンケート結果では、96.5%の方に「良かった」と回答した。ジュニアオーケストラならではの若く、熱く、アグレッシブな演奏が評価されている。随時入団に変更したことで、オーディションを受けるこどもたちが増えた。	文化振興課 (財団運営)	
18	ジュニアマーチングバンドの運営	団員数 87 人 (2020 年度)	↑	84 人	85 人	106 人		マーチングバンド全国大会一般の部銀賞 8 位のほか、市内イベントに出演（5 回）し活躍した。上級生が下級生に教えるサイクルができており、小学 4 年生と 22 歳が同チームで全国大会に出場できるレベルにあることは、全国的に極めて稀である。	文化振興課 (財団運営)	
19	舞台芸術人材育成活用・創造事業（とよたこども創造劇場）	参加者数 45 人 (2019 年度)	→	21 人	27 人	34 人		半年間の稽古を経て修了公演に出演した。参加した児童の保護者からは「これまで習い事が続かなかったが、演劇で初めて最後まで参加することができた。」という意見があり、こどもたちが安心して成長できる場となっている。	文化振興課 (財団共催)	
20	舞台芸術人材育成活用・創造事業（とよた演劇ファクトリー）	参加者数 32 人 (2019 年度)	→	18 人	22 人	23 人		ホール以外での公演を実施し、活動の可能性を提唱するとともに、来場者に演劇の多様性を感じてもらえた。また、公演ではアカデミー・ファクトリー修了生に裏方スタッフとして協力してもらい、これまで育成して生きた人材を活用することにも寄与した。	文化振興課 (財団共催)	
21	民芸の森活用事業	出展者数 3 組 (2019 年度)	↑	2 組	3 組	2 組		—	民芸館	

（３）文化活動団体間の交流と連携の促進

様々な分野の文化活動団体が連携して、文化事業を企画・実施することで、新たな発見や他分野への理解が促進され活動の質が向上する機会をつくる。

主な取組		指標 1（成果を数値で測る指標）						指標 2（成果の評価に用いることができる状態等）		所管課
NO.	内容	策定時 （把握年度）	目指す 方向	実績 ※太字は目指す方向のとおり推移を示す				実績		
				2022 年度	2023 年度	2024 年度	2025 年度			
22	おいでんアート体験フェア 【再掲】	出展者数 ※基準に適した数値が無い ため設定なし	↑	30 団体	34 団体	37 団体		—	文化振興課 （財団共催）	

- 【施策の評価・課題】
- 市民の創作・発表の機会について、特に、高齢者の活動者や参加者がコロナ禍前から回復していません。また、発表機会に加え、オンラインなど発表方法の選択肢も広がったことから、若手芸術家や市民等が求めている発表機会に沿った、「つくる・つたえる」機会の充実を図っていく必要があります。
 - 若手芸術家の発表機会について、各取組の中で卒団者や修了生がスタッフとして協力するなど、これまで育成してきた人材が活動を支えており、良い循環ができています。また、学校等で行われる文化的な活動が変化しており、学芸会を実施する学校はコロナ禍以降、大幅に減少しました。若い世代のニーズを掴み、学校以外での文化活動の情報を届けることで、若手芸術作家の発表機会の充実を今後も図っていく必要があります。
 - 文化活動団体数は年々減少していますが、個人で行う文化芸術活動については、団体に所属せず活動する人たちが増えているとも考えられます。団体に所属せずに活動する人たち同士の交流・連携を促進する取組を、検討していくことも必要と考えます。

■施策Ⅲ <むすぶ・つなげる>活動する人々の連携とまちの活性化への展開【主な取組 8 事業】

（１）創造的な活動を推進する市民主体の体制づくり

作家の制作をサポートし、また自ら芸術活動を行う市民主体の創造的な体制と活動の場づくりを進める。また、文化芸術に関する市民活動をまとめる制作側の市民を育成し、将来の地域文化の推進者となるための仕組みをつくる。

主な取組		指標 1（成果を数値で測る指標）						指標 2（成果の評価に用いることができる状態等）		所管課
NO.	内容	策定時 （把握年度）	目指す 方向	実績 ※太字は目指す方向のとおりに推移を示す				実績		
				2022 年度	2023 年 度	2024 年 度	2025 年 度			
23	とよた市民アートプロジェクト 【再掲】	メンバー累計 201 人 (2020 年度)	↑	201 人	221 人	318 人		—	文化振興課 (財団共催)	
24	とよたデカスプロジェクト	応募数 27 件 (2019 年度)	→	26 件	15 件	15 件		—	文化振興課 (財団共催)	

（２）文化芸術による地域資源の再発見と発信

市内の様々な地域の魅力を市民が文化芸術を通して再発見し、発信していく事業を推進することで、市民の創造性・企画力・地域への新たな視点を養い、まちへの愛着と活性化に寄与する。

主な取組		指標 1（成果を数値で測る指標）						指標 2（成果の評価に用いることができる状態等）	所管課
NO.	内容	策定時 （把握年度）	目指す 方向	実績 ※太字は目指す方向のとおりに推移を示す				実績	
				2022 年度	2023 年度	2024 年度	2025 年度		
24	とよたデカスプロジェクト	鑑賞・体験者数 5,467 人／10 企画 (2019 年度)	↑	10, 690 人 ／12 企画	2,963 人 ／7 企画	966 人 ／8 企画		豊田小原で「限界音祭」を開催し、プロジェクト実施後も名古屋市や豊田市のまちなかで継続してイベントを実施した。プロジェクト参加者も市外の人が多く、とよたの魅力を広く発信できた。	文化振興課 (財団共催)
25	農村舞台アートプロジェクト	鑑賞者数 2,480 人 (2019 年度)	→	244 人 (ライブ)	1,064 人 (展示)	86 人 (ライブ)		多文化共生を意識し、外国にルーツを持つ方を出演者として招聘した。また、日本の伝統芸のである人形浄瑠璃や落語をプログラムに盛り込み、さまざまな文化に触れる機会を提供した。	文化振興財団
26	小原和紙の後継者育成事業	育成事業の修了者数 累計 11 人 (2020 年度)	↑	累計 12 人	累計 13 人	累計 15 人		豊田市民美術展で市長賞など公募展で入賞したほか、グループ展や個展を開催し作家活動を継続した。（2024 年度度育成対象者 2 人、修了者 5 人）	小原支所

（３）文化芸術と様々な関係分野との有機的な連携

学校等へのアーティストの派遣や市民参加型公演などを通して、教育・福祉の現場と連携した取組を行う。また、民間や地域など、多様な主体と連携することで、社会の中で幅広く文化芸術の力を生かす。

主な取組		指標 1（成果を数値で測る指標）						指標 2（成果の評価に用いることができる状態等）		所管課
NO.	内容	策定時 （把握年度）	目指す 方向	実績 ※太字は目指す方向のとおりの推移を示す				実績		
				2022 年度	2023 年 度	2024 年度	2025 年度			
27	学校への文化活動者派遣事業	鑑賞・体験した児童数 4,747 人／65 校 （2019 年度）	↑	1,422 人 ／22 校	3,231 人 ／28 校	3,130 人／ 27 校		プログラム申込数は 55 件で昨年度よりも 10 件以上増えている。「教員ではフォローできないプロのアーティストによる指導は、こどもたちにとって貴重な体験となる。」といった意見が多い。	文化振興課 （財団共催）	
28	クラシック音楽・能楽地域活性化事業（アウトリーチ活動） 【再掲】	①学校の会場数 6 か所 ②福祉施設の会場数 4 か所 （2019 年度）	→	① 11 か所 ②0 か所	① 10 か所 ②0 か所	① 10 か所 ②なし		—	文化振興課 （財団共催）	
29	クラシック音楽・能楽地域活性化事業（出前コンサート） 【再掲】	福祉施設の会場数 5 か所 （2019 年度）	→	3 か所	6 か所	12 か所		—	文化振興課 （財団共催）	
30	美術館庭園活用事業	来場者数 10,504 人 （2019 年度）	↑	5,928 人	5,223 人	11,747 人		—	美術館	

【施策の評価・課題】

●とよた市民アートプロジェクトにおいては、参加者から市民活動団体が派生し、自主的にアートを活かした活動も開始していることから、市民主体の活動推進体制を育てることができました。

●「とよたデカスプロジェクト」については、近年応募件数が減っています。また、企画に対する鑑賞・体験者数も減少しています。文化芸術による地域資源の再発見と発信は「むすぶ・つなげる」取組を進める上で継続して必要な視点のため、社会の変化を捉えて取組の再編・見直しを進めることが必要と考えます。

●文化芸術と関係他分野との連携については、教育・福祉の現場との連携は進められていますが、企業や地域などの分野との連携は進んでいません。文化芸術の力を社会の中で生かすため、民間や地域など、より多様な主体と連携を進められるよう具体的な取組を行っていく必要があります。

●学校へのアウトリーチ活動等については、教育現場等からのニーズが高く、より一層充実していきたいと考えます。しかし、現状の運営方法では、現場との調整に時間や人手が掛かり、これ以上実施することが難しいため、より効率的な運営方法等具体的な対応策の検討を進めていく必要があります。

■施策Ⅳ＜つかう・いかす＞ 文化芸術活動を支える基盤整備 【主な取組 6 事業】

（１）施設環境整備による安全性・利便性の向上 文化芸術活動の場としての利用を促進するため、利用者ニーズや時代の変化に応じた修繕や改修を行うことで、利用者の安全性や快適性の向上を図る。

主な取組		指標 1（成果を数値で測る指標）						指標 2（成果の評価に用いることができる状態等）	所管課
NO.	内容	策定時 （把握年度）	目指す 方向	実績 ※太字は目指す方向のとおりの推移を示す				実績	
				2022 年度	2023 年度	2024 年度	2025 年度		
31	文化ゾーン整備事業	2023 年 12 月末までに文化ゾーン内のサイン設置完了	—	サイン計画の作成	・歩行者サイン整備完了（28 か所） ・車両サイン整備完了（16 か所）	・博物館進入路への景観舗装の実施 ・枝下用水周辺の景観向上策の実施		—	文化振興課
32	コンサートホール・能楽堂大規模修繕の準備	適切な大規模修繕のための設計完了	—	基本設計完了	実施設計完了	工事延期（設計等済）		—	文化振興課

（２）文化芸術活動拠点としての情報発信 公演・催事、ワークショップ等の文化芸術に関する市内外の情報を収集し、効果的に情報発信する仕組みをつくり、市民の文化芸術活動を支援する。

主な取組		指標 1（成果を数値で測る指標）						指標 2（成果の評価に用いることができる状態等）	所管課
NO.	内容	策定時 （把握年度）	目指す 方向	実績 ※太字は目指す方向のとおりの推移を示す				実績	
				2022 年度	2023 年度	2024 年度	2025 年度		
33	文化施設のメディア掲載（テレビ、新聞、雑誌、ウェブ等）	掲載数 （①テレビ、②新聞、 ③雑誌、④ウェブ） ※策定時に把握している 数値が無いため設定なし	↑	①30 件 ②219 件 ③170 件 ④157 件	① 59 件 ② 244 件 ③ 179 件 ④ 238 件	①22 件 ②205 件 ③122 件 ④142 件		—	美術館 民芸館 文化振興課
34	とよたアートプログラム（TAP） マガジンによる文化情報発信	ウェブサイト閲覧数 14,451 回 （2020 年度）	↑	22,286 回	17,353 回	15,580 回		TAP の活動は 2024 年度末で終了したが、ライターが引き続き別の媒体で活躍 できるよう繋いだ。	文化振興課 （財団共催）
		市民ライター数 3 人 （2020 年度）	→	4 人	8 人	7 人			

（３）施設職員の専門性強化 専門性をもった外部組織などと交流や連携を深め、施設スタッフの専門性を強化するとともに、コーディネート力の向上を図る。

主な取組		指標 1（成果を数値で測る指標）						指標 2（成果の評価に用いることができる状態等）	所管課
NO.	内容	策定時 （把握年度）	目指す 方向	実績 ※太字は目指す方向のとおりの推移を示す				実績	
				2022 年 度	2023 年 度	2024 年 度	2025 年 度		
35	民芸館・民芸の森の運営を担う 人材育成事業	—	—	—	—	—	—	指定管理事業者に運営を移行したため、柔軟な対応が可能になった。	民芸館
36	施設職員の事業企画力・コーデ ィネート力の向上	—	—	—	—	—	—	劇場職員セミナーや愛公文セミナーなど、他地域の施設職員と合同で行うセミナーに参加することで、スキルアップだけでなく、職員同士の情報交換を行い有益であった。	文化振興財団

【施策の評価・課題】

●文化ゾーン事業については、博物館開館に合わせ予定通りサイン整備等を進めることができました。また、コンサートホール・能楽堂の大規模修繕及びパイプオルガンのオーバーホールについて、設計を完了しました。今後も安心・安全な施設運営ができるよう、適正な改修時期、手法等の検討を重ねていく必要があります。

●文化施設での取組や成果について、市民への情報提供が不十分です。文化芸術活動の応援者を増やし、市民の誇りとなるよう、効果的な情報が提供できる仕組み作りを進めることが必要です。

●職員の専門性強化については、今後も多数ある研修の中から時流や市民ニーズを捉えた施設マネジメント・企画・コーディネートの力量向上に資するものを積極的に受講し、施設職員の専門性強化に努める必要があります。